

椰木貴代先生の「振り返りを通して、学習を調整する力を高めることのできる生徒の育成」について

愛知教育大学 青山和裕

椰木先生は振り返りに注目することで、生徒の自らの学習を調整する力を高めることに取り組んでいました。「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の中でも「自らの学習を調整しようとする事」は挙げられていることから、学習を調整できる生徒の育成は全国あちこちで行われています。

Zimmerman の自己調整学習理論なども参照しながら、振り返り活動を授業の中に位置づけ、メタ認知と学習方略の側面について生徒に意識づけるように努力されています。メタ認知を促すために設定した「わかったこと」「気づいたこと」「気を付けたいこと」「やってみようこと」などのラベルや、学習方略に関する 11 種類のフラッシュカードなどはとてもよく工夫されているなど感心しました。フラッシュカードは授業の流れに合わせて適宜提示されているので、きっと生徒さんたちも実感を伴って学習方略について学んでいくことができたとおもわれます。

生徒の振り返りの記述の量や質についても分析されており、その結果からは生徒が効果的な振り返りを身に着けていることも窺えます。ただし、協議の中で指摘もあったように生徒の振り返りの記述の内容は、その授業の内容にも依存するので、必ずしも十分なエビデンスにはならない可能性もあります。今後に向けた工夫として椰木先生は、「フラッシュカードを予想させてから提示する」なども挙げられています。先生に提示される前に自分たちで学習方略を想起することができれば内面化できていることが窺えるのでとても良い試みになると思います。他にも生徒の具体的な行動や発言等にも注目し、目指す生徒像に近づいたかどうかを分析していただければと思います。

また、もう 1 点提案したいこととしては、Zimmerman の自己調整学習のモデルでは、目標設定なども設定されています。学習に臨むにあたって目標を定め、学習を終えた後にその目標が達成できたかどうかを評価・反省するというメカニズムだと思います。こういったサイクルはテストでの得点や資格取得などわかりやすい学習目標を前提にしているものだと推察しますが、中学校数学の授業の中でどのように援用したらよいのか検討いただければと思います。学習にあたって生徒が持つべき目標とはどのようなもので、その目標にどこまで近づくことができたかをどのように評価するべきなのか、とても難しい問題だと思いますが、そのような意識をもって学習に臨むことができれば、自己調整学習としてとても高度なよいものになると思います。